

成果名	若齢期肥育開始によるF1雌の効率的肥育生産技術		
[要約]	生後6カ月齢からの若齢期肥育開始(6カ月齢区)は、生後10カ月齢から開始する慣行法(10カ月齢区)よりも、増体重、一日当たり増体量、飼料効率、肉質等が良好であり、低コスト生産が可能である。		
機関名	畜産試験場 酪農・環境部	連絡先	0974-76-1216

[背景・ねらい]

遊休地・転作水田の利活用と県内F1肥育技術の向上を目指すため、肥育前期、中期に粗飼料多給を行い、生後6カ月齢からの若齢期肥育開始による、増体、肉質及び低コスト生産の同時追求の飼養管理を検討。

[成果の内容・特徴]

粗飼料多給試験のため、飼料給与方法は6カ月齢区(生後6カ月齢から24カ月齢)、10カ月齢区(生後10カ月齢から28カ月齢)とも前期は目標DGを1.1Kgに設定し、濃厚飼料を日本飼養標準のTDN要求量の60%制限給与。中期は目標DGを1.0Kgに設定し、TDN要求量の80%制限給与。後期は目標DGを0.9Kgに設定し、TDN要求量の95%の制限給与を行った。残りのTDN要求量は粗飼料で補うようにした。その結果以下の成績を得た。

1. 肥育全期間の増体重、DGでは6カ月齢区の方が増体重で89.9Kg、DGで0.15Kgと良好である(表1)。
2. 1日1頭当たりの濃厚飼料摂取量及び平均飼料要求率は6カ月齢区の方が濃厚飼料摂取量で0.29Kg、飼料要求率で2.18良好である。また、1頭当たりの飼料摂取価格は6カ月齢区の方が13,979円安く仕上がり、低コスト生産が可能である(表2、表3)。
3. 枝肉成績はロース芯面積、BMS、等級等で6カ月齢区の方が優れていた(表4)。

[普及対象]

県下全域

[成果の活用面・留意点]

1. 肥育中期に当たる生後12～15カ月齢は、前駆脂肪細胞が脂肪細胞へ分化する時期であるので、肥育中期の濃厚飼料給与量はTDN要求量の80%を適正に給与する必要がある。
2. 6カ月齢区の肥育終了時(24カ月齢時)の通算DGは1.00Kgで、24カ月齢以降も増体が期待されるが、飼料効率、枝肉成績(BMS、皮下脂肪厚等)等から、24カ月齢出荷が効率的な出荷月齢である。
3. 血中ビタミンA濃度が最低値となる、生後18～20カ月齢時のビタミンA欠乏に注意を要する。

[関連データ]

表1 増体重及び一日増体量(DG)

単位：Kg

	肥育前期		肥育中期		肥育後期		肥育全期間	
	増体重	DG	増体重	DG	増体重	DG	増体重	DG
6カ月齢区	190.3	1.08	165.2	1.03	199.2	1.08	554.7	1.00
10カ月齢区	181.8	1.03	125.0	0.78	158.0	0.75	464.8	0.85

表2 飼料摂取量及び飼料要求率

	摂取量(Kg)		TDN摂取比率(%)		TDN摂取量 (Kg)	飼料要求率
	濃厚飼料	粗飼料	濃厚飼料	粗飼料		
前 6カ月齢区	4.14	3.72	60.0	40.0	5.04	3.83
期 10カ月齢区	4.88	4.28	60.5	39.5	5.90	4.83
中 6カ月齢区	7.68	2.75	81.9	18.1	7.20	6.97
期 10カ月齢区	7.94	2.72	78.8	21.2	7.38	9.52
後 6カ月齢区	9.80	0.90	93.3	6.7	7.68	10.33
期 10カ月齢区	9.96	1.06	92.8	7.2	7.86	13.33

表3 飼料摂取価格

単位：円

	肥育前期		肥育中期		肥育後期		小計		合計
	濃飼	粗飼	濃飼	粗飼	濃飼	粗飼	濃飼	粗飼	
6カ月齢区	35,011	20,445	58,498	11,883	95,409	5,256	188,918	37,584	226,502
10カ月齢区	41,243	23,312	60,648	11,620	97,704	5,954	199,595	40,886	240,481

表4 枝肉成績

	推定歩留	枝肉重量	ロース芯 面積(cm ²)	バラ厚 (cm)	皮下脂肪 厚(cm)	BMS	BCS	等級
6カ月齢区	70.3	436.9	47.0	7.2	2.8	3.8	4.3	B3 率
	± 0.9	± 30.4	± 4.2	± 0.8	± 0.5	± 0.5	± 0.5	75%
10カ月齢区	69.7	476.8	45.0	7.5	2.9	3.0	4.4	B3 率
	± 0.5	± 32.8	± 1.7	± 0.6	± 0.7	± 0.7	± 0.5	60%

[発表文献等]

大分県畜産試験場試験成績報告書(平成13年度)

月刊デーリイマン(平成15年4月号)